

リレー随筆

産業医と面談をする, ということ。

| 鹿児島市立病院 研修医 | 下島 尚樹

初めまして、同期の宿里先生より随筆のバトンを引き継ぎました、鹿児島市立病院研修医1年目の下島です。寄稿内容について年の瀬迫るころまで悩んでおりましたが、今後について考えさせられる体験をしましたので、それについて書かせていただくと思います。

研修医生活も半年以上たって慣れてきたかなと思っていた11月にある通知書が届きました。内容は、時間外労働が80時間を超える月が複数回あるので、産業医と面談してくださいとのこと。最初その紙を見た時、そんな大袈裟なって苦笑いしてしまったのが正直な反応でした。病棟業務にも少しずつ慣れてきて、任せてもらえることも増えてきて最近充実しているなって思い始めてきたばかりだったので、面談は断るつもりでした。同期に「こんな紙来たよ（笑）」って感じで話のネタにしたところ、殆どの同期がそんな紙知らないって反応でした。「俺もー（笑）。大げさだよなあ」という反応を期待し、笑い話にするつもりだったので戸惑いました。そのとき、「あれ、もしかして自覚がないだけであまりよろしくない状況なのでは？」と思い始め、同じように面談通知書を受け取った同期に話を聞いたところ、「私は受けるよ？自分じゃわからないこともあるし」と言われました。確かにその通りだと思いなおし、面談を受けることにしました。

希望書を出してから生活習慣について「そうだ、たぶんそうだ、わからない、少し違う、全く違う」の5段階で回答するチェッ

クシートを戴きました。きっと、リスクはほとんどない分類になるんだろうなあ……と思いながら回答してみると、なんと高リスク群。信じられなくてもう一度回答を見直すも、高リスク群。そんなハズはないと思いつつ、事務に提出しました。1週間後、来週の月曜日の14時に面談できないかとの打診が産業医の先生よりありました。その時に回っていた科が急患のファーストタッチは研修医という方針でしたので、急患が来なければ面談をお願いしますと返答しました。すると運悪く、月曜日の昼過ぎに急患が来ました。面談は来週に延ばしていただきました。次の週も面談時刻ちょっと前に急患が来ました。また、面談予定日を延ばしてもらいました。そして次の週も面談予定日に急患が来ました。ここまでくると、面談を阻止する何らかの力が働いているような気分になり、産業医の先生にも申し訳なくなったので、面談自体をキャンセルしたいとの旨を産業医の先生に伝えたところ、「先生のことが心配なんだよ。是非面談したいんだ」と産業医の先生から強く言われました。どうしよう……と思いつつ、指導医の先生に連絡を入れたところ、手の空いている他の先生が対応して下さることとなりました。いろいろありましたが、ようやく面談できました。

産業医の先生との面談は非常に穏やかなものでした。ストレスチェックシートを確認しつつ、最近の体調変化・思考の変化について確認していくなかで、自分に負荷がかかりすぎていたのかもしれないと思うよ

うになりました。また面談の終わり際に産業医の先生から「今の診療科、好きかい？」と聞かれました。回ったところ全部好きだと思いますと回答したところ、「それはいいことだね。じゃあ、忙しかった科を思い出してほしいんだけど、あと40～50年、その仕事を続けられる自信はあるかい？」と言われ、返答に詰まりました。そんな私の様子を見て、「どの科に進むかわからないけど、先生は周りをもっともっと頼るようにしないとね。僕らみたいな産業医とも、積極的に話し合っしてほしいな」と産業医の先生はおっしゃりました。

面談に至るまでの一連の出来事を思い出しながら、今書いております。立て続けに面談が出来なくなった時に、よくわからない力が働いていると確信していましたが、根拠のない確信を信じ切っていたその精神状態が大変よろしくない、今ならわかります。また、面談があるので月曜日急患対応できません、その一言すら言い出すのを忘れるような状態でした。自分のことは自分が一番わからないとは言いますが、ここまでわからないとは思って直しております。私の同期は優秀な人が多いです。そんな同期に恵まれた私は、いわば宝石の中に混じる石屑なのでしょう。それでも店頭に並ぶ以上は鈍くても輝く必要があるのだと思っておりました。その考え方を、見直す時期に来ているのかなと思い始めております。同じことを為すのに必要な苦労が他人よりも多い以上、他の人以上に自分を労わらないといけないなと思いました。今後どんな道を選択するかはわかりませんが、今後もキャパを超える日がどこかで来でしょう。またおかしな考え事をし始めた、その際には、産業医にチェックしてもらうことを躊躇わないようにしようと思いました。また残念なことに、産業医と面談すること自体を恥ずかしく思う風潮（私には

ありました）が散見されますし、面談したこと自体を揶揄する人もいます。こんな状況下で、自分と同じように悩む人がいないことを祈りますが、もし仮に来年の1年生、私の後輩にそんな子がいたら、産業医の先生方に相談することを躊躇ってほしくない、背中を押してほしい、そう思えた年の瀬でしたので、このことを寄稿させていただこうと思った次第です。駄文失礼しました。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

次号は、川内まきのせ泌尿器・腎クリニック／出口 央晋 先生のご執筆です。
(編集委員会)

